

2020. 4. 12

畑 啓之

「弱みを克服し強みを強化」か「弱みを手当てする段階で強みを醸成」か

誰しも弱み（才能として人に劣る部分）を持っているものだ。たまには、弱みなどはない、すべてに万能な人がいるかもしれないが、その人は万能であること自体が弱みになっている可能性もある。たとえば、周りの人との隔たりが大きく、周りの人が何で困っているのかを自身のものとして捉えられない、また、あまりにも常識に染まり過ぎている、などである。そのことが、世の中のニーズを見落とす結果にもつながっている可能性もある。（専門家であればあるほど、その思考方法が専門領域の常識から外へは踏み出せない）

本日の日本経済新聞の記事には、万能な人とは正反対に人が取り上げられている。記事を読み進めていくと、九九を覚えられない話が載っている。これなどは私も経験した。小学校2年生の時、まわりのみんなはすんなりと九九を覚えていくが、私だけはどうしてもこれが覚えられない。居残りである。そして、苦肉の策が新聞に記されている、九九表の半分だけを覚えるということであった。そのため、いまだに完全な九九を唱えることはできない。

小学校のその当時から今に至るまで、暗記することをできるだけ少なくしようと努めてきた。努めてきたというよりもそうせざるを得なかった。ものによってはキーワードをおぼえ、そのつながりを理解する。こうすると、もとの文章そのものではないが、その内容は正確に把握できる。数学などは必要最小限の公式について、それが導き出された道程を理解する。

弱みを克服するこの過程において、物事を理解し判断する能力はある程度は身に付いたものと思っている。「強みをより強化し」ではなく、「弱みをカバーしていく過程で強みが醸成されてくる」、この言葉が私には当てはまる。記憶する部分を極力捨てる戦略に徹したということである。痛しかゆしの部分もあるがしょうがない。人それぞれである。

記事に紹介されている、中村元氏もきっと同じような苦労をされたに違いない。この記事を読んでいて、そのご苦労が伝わってくる。大学での学科の成績がすべて可であったと記されているが、経営学部で得た知識は、知恵にまで昇華されていたものと考えられる。人の能力は基本的には点数で表すことは難しく、ましてや限られた時間内に答案を書き上げる大学での試験などはどこまでその人の実力が反映されるかは、大いに疑問である。

現代は正解のない社会ともいわれる。今までなかった正解を作っていく時代である。正解というものがあかないかもわからない。仮に正解があったとして、そこに到達するまでの時

間は早いに越したことはないが、いつまでに正解に到達せよと特に決められているわけでもない。

仮に独自の正解に到達できたとしても、その全く新しい正解を理解できる人がいったい何人いるのか？ きっとその人数は極めて少ない。アイデアに基づく正解とはそのようなもので、その正解は周りの人の常識からはかけ離れ受け入れられない場合が多々ある。周囲の人々があまりにも常識人であるためである。

その提案を半分は信用し、半分は眉唾に思いながらも中村さんのアイデアに乗った上司は大したものである。正解のアイデアが形あるものとなったとき、時間と共にその正解が市民権を得、そして常識となっていく。この常識となったとき、この仕事（正解）は誰が発案したものであるかが明確に記録され認知される社会、これこそがこれからの日本に求められる姿だ。中村さんが発案者であることが明確な、「水族館をオアシスへ」のケースはその認知においても成功事例であり、今後のあるべき方向を指し示している。

日本の社会の変革は、個性の尊重からスタートすべきである。「労働生産性」の向上は1割向上、や割向上と表現されるが、無から有を生じせしめる発想の転換により作り出されるビジネスは無限大の向上を成し遂げる。日本の社会は、経験と冒険に裏打ちされた発想が求められる時代に入っている。とくに、ポスト新型コロナウイルス禍の後にはこれなくしては日本は世界の中での立ち位置を失うことになるだろう。

魚

の名前はさっぱり分らない。興味がないものをゼロから覚えられるわけではないですよ。水族館で働く者とは思えないことを言う。

大学ではマーケティングを学び「単位ぎりぎりびびりたり、しかもオール可」で卒業した。テレビなどメディアで働きたかったが「人気業界で天才肌の人たちがみんな行く。絶対に勝てない」。たまたま縁があって入社したのが鳥羽水族館(三重県鳥羽市)だった。「人に見せて伝える」という点では水族館もメディアだ、という理屈で自分を納得させたそう。

魚の名前覚えられない ダメ飼育員を導いた亀

同期は海洋学部出身者など生物に詳しい人ばかり。「初任給で図鑑を買って全部覚えると言われて。ただでさえ記憶力が悪いのに、無理よね」。客から生物の生態を尋ねられたら、水槽の近くにある説明文を「チラ見」して対処することにした。

そんなダメ飼育員がいかにして、日本でただ一人という「水族館プロデューサー」に交身したのか。都会の高層ビルを背景に、ペンギンたちがまるで空を飛んでいる。不思議な光景で話題を呼んだのが、2017年にサンシャイン水族館(東京・池袋)の屋上に設けた「天空のペンギン」だ。幅12メートルの水槽は厚手の窓ガラスのよう。ペンギンが気持ちよさそうに行き交い、写真を撮らずにいられない。同年

負けたやつだけ進化する

肩書は水族館プロデューサー、なのに魚への興味も知識も無い。そんな中村元さんが、サンシャイン水族館などを人気スポットに導いたのはなぜか。自身の短所を知り、それをバネに新たな道を見つけ出す。その気づきをくれたのは亀たちだった。

お客さんは自分と同じで、学術めいた生態や分類などには興味がないのだ。「他の飼育員は、魚に詳しくない人の気持ちなんて分からない。自分が一番お客に近い」。知識の乏しさという弱点が、武器に変わった瞬間だった。

そして「短所を克服する」という発想も間違っているという。中村さんは暗記は大の苦手でも九九にも苦戦した。「人の10倍の時間をかけて克服する、なんてしたら他のことができなくなる」。ある日、九九表を眺めていると「数字を入れ替えれば覚える量は半分で済む」と気付いた。3×7を覚えておけば、7×3は覚えなくてもいいじゃないか。

中村元（水族館プロデューサー）(Wikipedia)

中村元（なかむらはじめ、1956年 - ）は、日本各地の水族館で開業・リニューアル時に展示施設のデザイン・構成などのプロデュースを業として手がけるフリーランスの「水族館プロデューサー」である。水族館に関する

一般向けの書籍の執筆を手がけるエッセイストとしても活動している。特定非営利活動法人伊勢志摩バリアフリーツアーズセンター理事長。NPO法人伊勢志摩NPOネットワークの会会長。東京コミュニケーションアート専門学校教育顧問（ドルフィントレーナー学科講師）。

略歴

1956年 三重県一志郡嬉野町（現・松阪市）に生まれる。

1980年 成城大学経済学部経営学科卒業

1980年 株式会社鳥羽水族館入社、飼育係（アシカトレーナー）、企画室長などを経て副館長。[2]

1982年 第一子誕生

2002年 鳥羽水族館を退社、フリーランスでは日本初の「水族館プロデューサー」となる。

2002年～ 新江ノ島水族館プロデュースと展示監督となる。2004年、新江ノ島水族館をプロデュース。

2011年、サンシャイン水族館をプロデュース。

2012年、山の水族館をプロデュース。

2017年、マリホ水族館をプロデュース。

著書

『海からの贈り物 クジラ,サンゴ礁,アザラシ… 水の中の不思議写真館』中村庸夫,鳥羽水族館写真 KK ベストセラーズ、1991年。 から

『水族館哲学 人生が変わる 30 館』文春文庫、2017年。 まで 19冊